前途多難な有志連合

―11・29全学集会より―

ルポ

「一般学生」が遊離？

本格的な活動は来春から

有志連合会および全明クラス連合の共催による「全学集会」が二十九日、和泉地区中庭で開かれ、①中執リコール②スト権解除に向けての本格的な活動にスタートを切ったしかし、当日は全共闘系学生と、警備に当っていた体育会の学生が衝突し混乱を招いたり、集会の議事進行の上でも同連合と、共催の全明クラス連合（準）と参加者との間にはっきりとした意見の食い違いが見られるなど、決して前途は明るくないことが認められた。しかし、それ以上に注目されるのは、「一般学生のために立ち上った」はずのこの集会に参加した一般学生が余りに少なかったことでなかっただろうか。

新たな試練を迎えた有志連合会を取りまく情況にスポットをあててみた。

五八三五名の署名をバックに、学生会中執（両川敏雄委員長）に学生大会開催を要求し、拒否された有志連合会は、この日独自に全学集会を開催し「全学集会→学生大会→中執リコール＝スト権解除」を指向した。しかし、同連合の夢みた〝青写真〟には、意外に反対する参加者が多く、結局「全学集会」は「学生大会」になり得ず、スト権解除要求・中執リコール要求・ロックアウト解除要求――などを確認する〝単なる〟集会にしかなり得なかったのではないのかという疑問がわく。

全学集会の前日に行なわれた「記者会見」で、中屋事務局長が「全学集会が成功するにせよ、失敗するにせよ、全くの一般学生がここまでやれたということは全国でも珍らしいケースだと思う」と語っていた。が、その全学集会の後彼は「実に腹が立ちましたねェ。まわりで見物していた一般学生は一体どう考えているんでしょうね。」とハキ捨てるようにつぶやいたのである。その日の参加者は、主催者側発表では約三二〇〇人でしかもその大半は、学生服姿の体育会学生と共催の形をとった全明クラス連合（準）の学生にみえた。皮肉にも、そしていみじくも中屋事務局長のいった〝全くの〟一般学生は実は、生協会館の上から高見の見物？に興じていたのである。その数は約二、三〇〇――一般学生の持つ弱み（討論の場の欠如）を克服することから立ち上がったハズの同連合会にとってこの事実はあまりにも〝冷厳〟すぎたようである。

有志連合にツレない素振りをみせた一般学生――当の本人の胸の内はどうなのだろうか。

「今は何も考えたくはないんです。学生の本分は〝ベンキョウ〟することですから、授業を受けて友人と楽しくやっていくことにしたんです。以前は〝学問〟とは何かとか、全共闘などのいっているものごとの本質を理解しようとしたんですが、最近はやはり自分は適当に日和って無関心でいるのが、一番いいと結論を出したんです」という法学部一年のH君。同君にうかがえるような〝事なかれ主義〟が学生にはびこっている。

もう一人、彼は政経学部三年。「なぜ和泉でなんかやるのだ。面倒くさくって、行く気はしねェや」と話す学生は論外であるが、ただそれを論外として片づけるだけでいいのだろうか。

「ポツダム自治会がすでに破綻したことが示すように、意識のない者に対して期待しても何も得られないことは、目に見えている」

「中執リコールには賛成だが、それだけではなく、われわれに課せられた様々な問題から考えていかねば、片手落ちではないのか」などといった、同連合会自体への不満派も多いことは注目すべきことだろう。

体育会は独自の道へ

ところで、集会の進行途中で、共催の形をとっていた全明クラス連合（準）との間に会の運営をめぐって大きな食い違いが生じた「学生大会切り変え」を主張する有志連合に全明クラ連は反対を唱えたのである。

この事態を契機に、あくまで「政治的に無色な組織」と規定する有志連合会は「今後は一切の政治組織との共闘は組まない」方針を一層、強固にしたものとみられる。

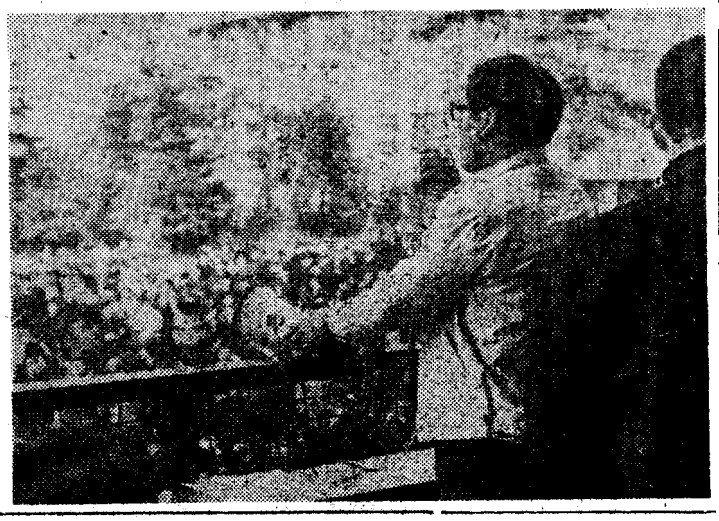
また一方で、この有志連合会の運動に〝アンチ〟の姿勢を示す全共闘系学生の批判は大要すれば次の通りである。「われわれ全共闘は彼ら『有志(?)連合会』が、われわれの提起してきた課題、即ち国家権力が大学にかけてくる帝国主義的再編（＝目的大学、農学部再編切り捨て、学長への権限強化など）に対し、いかに闘うのか？との問に何ら答えずして欺瞞的に事態の収拾を謀っているのを決して許してはおけない」（全共闘デジビラ『志向性なき有志連合の闘争破壊を許すな！』より）

これまで有志連合会のバック・アップにあたっていた体育会（渡辺健二委員長＝商四）は「これまで有志連合会の盛りあげに協力してきたが、ようやく一本立ちの見通しがついたので体育会としてはまた別に、独自で運動をやっていきたい」と見解を発表し、直接的な援助はしない方針を決めた。

これによって有志連合会は名実共に〝一人立ち〟の格好になり、有志連合＝体育会というイメージからの脱皮を図ろうとしている。

また今後の活動方針として、有志連合会の認識を深めてもらおうと来春早々から情宣に重点を置く意向を固めている。これからしばらくは〝冬眠中〟という訳である。有志連合会の行方は①頼みの一般学生の遊離をいかに解消するか、②賛助団体との別離からどう活動を展開するか――の難題を前面にかかえ、前途多難といったところ。

（西記者）



全学集会・中央は渡辺体育会委員長（29日＝和泉中庭）